

工夫と忍耐の 欧州「二〇〇〇年住宅」暮らし

在住
ジャーナリスト
福田直子
Naoko Fukuda

「■地区で四部屋、●●マルまで払えます。アパートを見つけてくれた人には、報酬として△△マルを差し上げます」

「こー、二年、住宅難がますますエスカレートしているミュンヘンでは、このような住宅探しの広告が、街のあちこちらの柱や壁に貼られている。これは人口の増加に対して圧倒的に住宅の数が不足しているためで、好条件の物件はまさに取り合いである。そして、少ない住宅の中でもとくに人気を集めているのが「二〇〇〇年住宅」だ。

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて建築された住宅は暖房費がかかり、また常に改装も必要であるという理由から、長い間軽視されてきた。ところが一九八〇年代以降、人気が急上昇。天井が高く、優美で、ほかの時代に建築された住宅とは全く趣きが違う、というのがウケているようだ。

ミュンヘンでは市内の建築物の九〇％近くが先の戦争で破壊されたため、百年前の住宅は今となってはなかなかの高根の花である。五年前、私があるような住宅を借りられたときは、まさに宝くじにでも当たったような心境であった。

四部屋もある一九〇四年建築のアパートは南向き、どの部屋にも大きな窓があり、しかもベランダ付きで、市中心部の便利な立地とあれば、住宅にうるさいドイツ人でさえうらやまほど。引越したのは夏だった。

ところが、やがて冬になり、唯一の欠点を「体感」することに。石造りの住宅というのはすこぶる寒い。とりわけ冷え込んだある早朝、台所の窓の内側になんと、つららができていた。これではあんまりだということで、家主に手紙を書いたところ、窓枠を修理してなんとか耐えられるまでになった。しかし、さらに断熱性をよくするためには、職人を頼み、少なくとも二万マル（約百万円）かけて旧式の暖房をすべて交換する必要があるといわれた。

やはり、住宅は見た目と、実際に住むのとは大きく違う。最近の住宅は、暖房効率を念頭において建築されているらしいが、住宅とは時代によって基本的考え方がずいぶん違うものだ。そういえば、ウィーンのカフェ文化は、カフェへ行けば「自宅より暖かい」ということで流行したと、誰かが書いていた。

ときどき市内で、明らかに窓を塗りつぶしたような形跡が見られる住宅を見かけることがある。「二〇〇〇年住宅」では窓が少ないほうが当然、暖かいので、これも長年の生活の知恵なのだろうか。

また、住宅を長持ちさせるためには湿度の調整も必要で、カギとなるのは地下室である。季節によって、地下室の窓を開けたり閉めたり。しかし一体、いつ開けていつ閉めたらよいのか、これも家主の長年の経験と勘頼み。

そういえば、こんなことがあった。知人は一九三〇年代に建てられた一軒家を「要改装」の条件で購入し、改装費を安くあげるために自分で改装に着手。ところが半年後、戦争中の混乱のさなかに元の所有者から遺産相続されていたことが判明した。しかも七十年近くたった今となっては、相続人は十八人になっていった。知人は相続を無効にしてもうするため、十八人すべての署名集めに奔走するはめに……。

果たして、住宅とはどのぐらい持つのが理想なのだろうか。ともかく、「二〇〇〇年住宅」とうまく共存していくためには、たゆまぬ工夫と忍耐が必要である。